

傳 藤原行成 和漢朗詠集 一

301
10

帙入



始



傳藤原成書

和漢朗詠集

釋文

一



傳藤原行成筆 和漢朗詠集解題並釋文(春)

解題

和漢朗詠集は上下二卷よりなり、一條天皇の頃の人、藤原公任の撰に
なれるものであり、漢詩文の句と和歌とを採録し、夏夏春冬の
事を詠せる詩歌を以て上巻とし、下巻は天文、風景、人事等を詠せ
しものよりなつて居る。

古來和漢朗詠集は著名なものであつて、その傳寫又は板刻の類は
非常に多く、完本もあれば古筆切と稱される書寫の斷片もあり、殆
んど無數と云つてよい位であらう。

中にも帝室の御物となつて居る藤原行成筆と傳へられるこの和漢
朗詠集は殊に有名であり、和漢朗詠集と云へばこの行成本を指す程
に代表的なものである。この御物朗詠は竪六寸六分、横四寸、上下
二卷の二帖からなつて居り、上卷五十八枚、下卷は五十九枚である。



料紙は色唐紙を用ひ、色は白赤、うす藍、黄、うす黄、うす茶、草等であり、それに白や黄の雲母をもつて唐草、鳳凰、菱、龜甲、菊、鶴などの優雅な文様がおいてある。

この帖はもと歌人猪苗代兼戴の所有のものであつたが、後に近衛家の有に歸し、明治十一年に近衛家より帝室に献上、御物となつて今日に至つたものである。書風を見るに、詩歌和歌共に筆路暢達、漢字は楷あり、或は行草あり和歌は時には一首全部を變体假名を用ひたるものあり、筆の驅使誠に自由自在にして、圓熟なる技を示して居り、近世假名を學ぶ者、好手本として推重されたものである。帝室に御物になつて居る和漢朗詠集には、この外に藤原公任の筆と稱せらるゝものと、今一つ、これまた藤原行成の筆と稱されてゐるものゝ二種があり、共に完全に一卷をなして居る點大いに珍重するものである。

本集には誤寫した個所もある様であるが、すべて原本の儘に釋文を付して置いた。

傳藤原行成筆 和漢朗詠集(春)

釋文

倭漢朗詠集卷上

春

立春 早春 春興 春夜 子日付著 三月三日

暮春 三月盡 閏三月 鶯 霞 雨 梅付紅

柳 花付落 躑躅 藤 歎冬

夏

更衣 首夏 夏夜 端午 納涼 晚夏

花橘 蓮 郭公 螢 蟬

秋

立秋 早秋 七夕 秋興 秋晚 秋夜

八月十五夜付月 九月付菊 九月盡 女郎花 萩
蘭 槿 前栽 紅葉付落 雁付歸雁 虫
鹿 露 霧 罽衣

冬

初冬 冬夜 歲暮 爐火 霜 氷付春氷
雪 霰 佛名

春

立春

遂吹潜開不待芳菲之候迎春乍
變將希雨露之恩立春日内閣
蓮花賦
池凍東頭風度解窓梅北面雪封寒萬茂
としのうちに者るは支爾けりひことせ
をこそとやい者むことしとやい者む元方

柳無氣力條先動池有波文氷盡開白
今日不知誰計會春風春水一時來同上
夜向殘更寒磨盡春生香火曉爐燃良春道
所てひちでむ春びしみ徒のこ本れる
を者るたつけふの可世やと久らん紀貫之
者る多つといふば可り爾やみよしの
や万も可須みてけふ者みゆらむ忠岑

早春

氷消田地蘆雖短春入枝條柳眼低元
先遣和風報消息續教啼鳥說來由白
東岸西岸之柳遲速不同南枝北枝
之梅開落已異保風
春生
送地
形
紫塵懶蔽人拳手碧玉寒蘆雖脫囊野

氣霽風梳新柳髮。氷消浪洗舊苔鬢。都
庭增菊色。晴沙綠林變。容輝宿雪紅。紀
い盤そゝ久多るひのうへ能さわらひの
もえいづるはる爾な利爾个る可那志貴皇子
た爾可せにと久るこほりのひまごと
にうちい徒るなみや者る能はつ花雷純
みわ多世ばひらの多可ね爾ゆ支え
て王可那つむべ久能者那利爾个り衆盛

春興

花下忘歸因美景。樽前勸醉是春風。白
野草芳菲紅錦地。遊絲綠線亂碧羅天。
哥酒家々花處々。莫空管領上陽春。白
山桃復野桃。日曝紅錦之幅門柳復

岸柳風綻麴塵之絲。注處花音好齊名
着野展敷紅錦繡。當天遊織碧羅綾。野
林中花錦時開落。天外遊絲或有無。田達音
笙歌夜月家々思。詩酒春風處々情。
毛ししきの於本みやびとはいとまあれ
やさ久ら可ざしてけふも久らしつ赤人
はる者那ほ王れ爾てし利ぬ者那さ可
利ころのど个支ひとはあらじ那忠岑

春夜

背燭共憐深夜月。踏花同情少年春。白
者るのよ能やみはあやなしむめの八
那いろこそみえね可やはか久るゝ射恒
子日

倚松樹以摩腰習風霜之難犯也、和菜
 羹而啜口期氣味之克調也、
 倚松根摩腰千年之翠滿手折
 櫻花插頭二月之雪落衣、
 ねのび春る能べ爾こ万つのな可りせ
 者ちよの多めしにな爾をひ可ま志忠岑
 ちとせまでち支利し万徒もけふよ
 利はきみ爾ひ可れてよろづよやつむ能宜
 彌のひしにしめつる能べのひめこまつ
 ひ可でやちよの可けをまた万し清正
 若菜
 野中荖菜世事推之蕙心鐘下和
 羹俗人屬之羹指、

あ春可らはわ可那つませむ可た
 を可能あしたの者らは今日所や久める人丸
 者るたゝばわ可那つまむとしめ志能
 爾きのふも介ふ毛ゆ支八ふ利つゝ赤人
 ゆ支てみぬ人もし能べと者るのゝ能
 可多み爾つめるわ可那ゝ利介り貫之
 三月三日付桃
 春來遍是桃花水不辨仙源何處尋王羅
 春之暮月々之三朝天醉于花桃李
 盛也我后一日之澤万機之餘曲水雖
 遙遺塵雖絶書巴字而知地勢思魏文
 以散風流蓋志之所之謹上小序、
 煙霞遠近應同戶桃李淺深似勸盃、

水成巴字初三日源起周年後幾霜爲茂
礙石遲來心竊待牽流過過手先遮雅規
夜雨偷濕曾波之眼新嬌曉風緩吹不
言之口先咲桃始華賦
みちとせになるといふも、能ことしよ
利者那さ久はる爾あひ所め爾个利

暮春

拂水柳花千万點隔樓鶯舌兩三聲元
低翅沙鷗潮落曉亂絲野馬草深春
人無更少時須惜年不常春酒莫空野
劉白若知今日好應言此處不言何順
い多づら爾春久須つ文ひは於ほ可れ
と者那みて久ら須者る所春久那支

三月盡

留春々不住春歸人寂寞厭風々不
定風起花肅索白
竹院君閑銷永日花亭我醉送殘春白
惆帳春歸留不得紫藤花下漸黃昏白
送春不用動舟車唯別殘鶯與落花管
若使韶光知我意今霄旅宿在詩家同上
留春不用關城固花落隨風鳥入雲尊敬
けふとの美者るをお毛はぬと支だ爾毛
多つことや春き者那の可个か盤射恒
者那も美那ちりぬるやどはゆ久者るの
ふるさとこそ所なりぬべら奈禮買之
またもこむと支曾とお毛へど多のまれ

ぬわ可み爾しあれ盤を志久もある可那貫之

閏三月

今年閏在春三月剩見金陵一月花陳侍御

歸谿歌鶯更逗留於孤雲之路辭

林舞蝶還翻於一月之花順

花悔歸根無益悔鳥期入谷定延期蘇滋

さ久ら者那者る久は、れるとした爾も

ひとのこゝろ爾あ可れや者春る伊勢

鶯

鶯既鳴兮忠臣待且鶯未出兮遺賢

在谷鳳為王賦

誰家碧樹鶯啼而羅幕猶垂幾處

華堂夢覺而珠簾未卷曉賦

烟霧山鶯啼尚少穿沙蘆筍葉纒分元

臺頭有酒鶯呼客水面無塵風洗池白

鶯聲誘引來花下草色拘留生水邊白

感同類於相求離鴻去雁之應春轉會

異氣而終混龍吟魚躍之伴曉啼

燕姬之袖暫收猜撩亂於舊栢周郎

之管頻動願間關於新花管三品

新路如今穿宿雪舊宿爲後屬春雲香

西樓月落花間曲中殿燈殘竹裏音香三品

あら多まのとしたち可へるあし多よ利ま

たるゝものはう久ひ春のこゑ素性

あさみどり者るたつそらにう久ひ春

能者つこゑまたぬひとはあらし那女御

う久ひ春のこゑ那可り世ばゆ支ええぬやまざとい可で者るをしらま志中務

霞

霞光曙後股於花草色晴來嬾似烟白

鑽沙草只三分許跨樹霞纒半段餘

昨日こそ所としはくれし可者る可須み

可春可のやまに者や多ちに个利人丸

はる可須み多てるやい徒こみよしの

よしのやまにゆ支はふ利つ

あさひさ須三ねのしらゆ支むら支えて

者るの可春みはや多ちに个利

或垂花下潜増墨子之悲時舞鬚間

雨

晴動潘郎之思密雨散絲賦
長樂鐘聲花外盡龍池柳色雨中深李橋
養得自爲花父母洗來寧辨藥君臣紀
花新開日初陽潤鳥老歸時薄暮陰晉三品
斜脚暖風先扇處暗聲朝日未晴程保胤
さ久ら可利あめはふ利支ね於なし久
ばぬるとも者那の可个に可久れむ
あをや支のえ多に可れる者るさめは
いともてぬ个るたま可と會みる伊勢

梅

白片落梅浮潤水黃梢新柳出城墻白

梅花帶雪飛琴上柳色和煙入酒中草半標

漸薰臘雪新村裏偷綻風未扇先村上御梨



青絲出陶門柳、白玉裝成庚嶺梅。江相公

五嶺蒼々雲往來、但憐大庾万株梅。

誰言春色從東到、露暖南枝花始開。香三品

い二しと志ねこしにうゑしわ可やどのわ
可支のむめは、那さ支に遣り、安信廣庭
わ可せこ爾み世むとお毛ひしむめの者奈
それと毛美え須ゆ支のふれ、盤赤人
可をとめて多れをらざらむ、め能者那あ
やなし可寸みたち那可久し所躬恒

紅梅

梅含鵝舌兼紅氣、江弄瓊花帶碧文。元

淺紅鮮媚仙方之雪魄、色濃香芳郁。

妓鐘之煙讓薰。正通

有色易分殘雪底、無情難計夕陽中。中之王

仙白風生空簸雪、野鐘火暖未揚煙。齊名

支み那らで多れ爾可美世む、め能花

いろをも可をもしるひと曾志る、女則

いろ可をばお毛ひもいれすむめの者那つ

ねならぬよによ所へてぞみる、華山院御製

柳

林鶯何處吟、筇柱、墻柳誰家曝麴塵。白

漸欲拂、他騎馬客、未多遮得上樓人。白

巫女廟花紅似粉、胎君村柳翠於眉。白

誠知老去風情少、見此爭無一句詩。白

大庾嶺之梅早落、誰問粉粧、匡廬山

之杏未開、豈趁紅艷。江納言

雲擎紅鏡扶桑日、春媚黃珠嬾柳風。
 稽宅迎晴庭月暗、陸池逐日水煙深。後中書王
 潭心月泛交枝桂、岸口風來混葉蘋。晉三品
 あをや支のいとよ利可久るはるしも
 所美多れて者那は本ころび爾个る貫之
 者る久れ盤し多利やな支能まよふいと
 能いも可ころ爾な利爾个る可那
 あをやぎ能万由爾こもれるいとなれ
 はるの久る爾所いろまさ利ける中納言
 花付落花
 花明上苑、輕軒馳九陌之塵、猿叫空山、
斜月登千巖之路、爾賦
 池色溶々藍染水、花光焰々火燒春。白

遙見人家花便入、不論貴賤爲親疎。白
 瑩日瑩風高低千顆万顆之玉、染枝
 染浪表裏一入再入之紅。花光浮水上
 誰謂水無心、濃艶臨兮波變色、誰謂
 花不語、輕漾激兮影動唇。同上
 欲謂之水、則漢女施粉之鏡清瑩、欲
 謂之花、亦蜀人濯文之錦榮爛。同上
 織自何絲、唯暮雨裁無定樣、任春風。晉三品
 花飛如錦幾濃粧、織着春風末疊箱。
 始識春風機上巧、非唯織色織芬芳。英明
 眼貧蜀郡裁殘錦、耳倦秦城調盡箏。相規
 世中たえて櫻能な可利世ばゝるのこ
 ろはのど可ら末之

和可や東能者那美可天良仁久留人盤
地里奈無乃知所戀之我る邊起別恒
みての美や人爾可堂らむ山櫻て
ごとにを利てい邊川と耳世無業性

落花

落花不語空辭樹流水無心自入池白
朝踏落花相伴出暮隨飛鳥一時歸白
春花面々闌入酣暢之筵晚鶯聲々

豫參講誦之座江

落花狼籍風狂後啼鳥籠鐘雨打時江

離閑風翎憑檻舞下樓娃袖願階韻音三品

斜久羅知る故能し堂可勢波左無

閑良天所良兒志羅禮ぬ雪所ふ里介る貫之

と能もりのご毛能みや徒こ心あらばこの
者るば可利あ散支よめ春那

藤

帳望慈恩三月盡紫藤花落鳥闌々白

紫藤露底殘花色翠竹煙中暮鳥聲相規

たごのうらにそこさへ爾ほふち那三

を可ざしてゆ可むみぬひとの多め丸

東支はなる万徒のな多て爾あや那く

もかゝれるふちの散支てちる可那貫之

躑躅

晚藥尙開紅躑躅秋房初結白芙蓉白

夜遊人欲尋來把寒食家應折得驚順

お毛ひいづると支はのやま能い者つしじ

い盤ね者こそ所あれ戀し支も能を

歎冬

點著雌黃天有意歎冬誤綻暮春風

書窓有卷相收拾詔紙無文未奉行保胤

可はず那久可み那ひ可者に可个みえ

ていまやちるらんやまぶ支の者那厚見女皇

わ可やどの夜へ山吹はひとへ多爾ちり

能こらなん者るの可多み爾兼盛

夏

更衣

背壁殘燈經宿燭開箱衣帶隔年香白

生衣欲待家人着宿釀當松邑老酣讃州作

者那のいろ爾所めしたもとのを志个

連磐ころも可へう支今日爾もある可那

首夏

甕頭竹葉經春熟階底蕃薇入夏開白

苔生石面輕衣短荷出池心小蓋疎安長

わ可やどの可支ねや者るをへだ徒らん

なつ支に介りとみゆるうの者那順

夏夜

風吹枯木晴天雨月照平沙夏夜霜白

風生竹夜窓間臥月照松時臺上行白

空夜窓閑螢度後深更軒白月明初白

なつのをねぬ爾あ个ねといひお支志

ひとはものをや於もはざ里个む

本さ支須な久やさつ支のみじ可よ

もひと利しぬれ盤あ可しかねつも人丸
維都乃與能布敷可東須麗波本度
幾數那久悲登許惠耳阿具留
志乃免

端午

有時當戶厄身立無意故園任脚行文人
わ可こまごけふ爾あひ久るあやめぐさ
於ひお久るゝやまくるな果らん類基
き能ふまでよ所爾お毛ひしあやめくさ
けふわ可やどの徒まとみる可那能宜

納涼

青苔地上銷殘雨綠樹陰前逐晚涼白
露篔清盤迎夜滑風襟蕭灑先秋涼白

不是禪房無熱到但能心靜即身涼百
班婕妤團雪之扇代岸風兮長

忘燕昭王松涼之珠當沙月兮自得道衡

臥見新圖臨水障行吟古集納涼詩蒼

池冷水無三伏夏松高風有一聲秋英明

すゝしやご久さむらごとに多ちよれ
ばあさつ所まさるごこ那つの者那
した久ゝるみづにあ支こ所可よふ奈れ
む春ふいづ美のてさへ春くし支中務
ま徒可かのい者か能かみ徒をむ寸びつゝ
なつ那支とし東お毛ひける可那惠慶

晩夏

竹亭陰含偏宜夏水檻風涼不待秋白

那つ者徒るあふ支とあきのしらつゆとい
づれ可まつは於可むと春らん
ね支ことも支可であらぶる可み多ちも
けふはなごしとひごはいふ奈利

橘花

盧橘子低山雨重、柑欄葉戰水風涼。白
枝繁金鈴春雨後、花薰紫麝飄風程。後中書王
さつ支万徒者那多ちばなの可を可介
ばむ可しのひと能所での可所春る
本ご、支須者那多ちばなの可をこめ
てなくはむ可し能人やこひしき

風荷老葉蕭條綠、水蓼殘花寂寞紅。白

葉展影翻當砌月、花開香散入簾風。白
煙開翠扇清風曉、水泛紅衣白露秋。許渾
岸竹條低應鳥宿、潭荷葉動是魚遊。在昌
緣何更覓吳山曲、便是吾君座下花。千葉蓮
經爲題目佛爲眼、知汝花中植善根。爲靈
者ち寸者のにごりに所万ぬこゝろも
てなど可はつゆをたまとあざむ久

郭公

一聲山鳥曙雲外、万點水螢秋學中。許渾
さつ支やみ於ぼつ可那支爾本とゞぎ須
な久那るこゑのいとゞ者るけさ明香王子
ゆ支やらでやまぢ久らしつほとゞ支須
いまひとこゑの支可まほしさ爾公忠

さよふけてねざめざりせば本と、文寸
ひとづて爾こ所支久べ可利个れ忠見

螢

螢火亂飛秋已近、辰星早沒夜初長、元

霞兼水暗螢知夜、楊柳風高雁送秋、許渾

明々仍在、誰追月光於屋上、皓々不消、

豈積雪斤於床頭、秋螢照供賦

山經卷裏疑過軸、海賦篇中似宿流、同前

久さふ可くあれ多るやどのと毛しび

能可せに支えれば本多るなり个利

徒、めど毛か久れぬもの盤那つむし

のみよりあまれるおのひなり个利

蟬

遅々兮春日、玉登暖兮温泉溢、嬋々

兮、秋風、山蟬鳴兮宮樹紅、感宮高

千峰鳥泳含梅雨、五月蟬聲送麥秋、李嘉祐

鳥下綠蕪秦苑寂、蟬鳴黃葉漢宮秋、許渾

今年異例腸先斷、不是蟬悲客意悲、管

歲去歲來聽不變、莫言秋後遂爲空、紀

な徒や万の三ねのこすゑし多可个れ盤

所ら爾所せみのこゑも支こゆる

これをみよひとともと可めぬこひすとてね

を那久むしのなれる春可たを重光大納言

扇

盛夏不銷雪終年無盡風、引秋生手

裏、藏月入懷中、白

不期夜漏初分後唯翫秋風未至前管三品
 あま能可は、へ須とし支多那者た爾に
 阿ふ支の可せを那本や可さまし七夕届合
 あまの可者あふ支能可せ爾久も八れて
 所ら春みわ多る可さ、支の八志元同輔
 支み可て爾ま可須るあ支能可せ奈れ
 者那び可ぬ久さもあらじと所於もふ中務

昭和十年五月二十五日印刷
定價金貳圓參拾錢

全集題名
本配回六第
(一)集詠朗漢和

編輯者 東京市下谷區中根原町七二 武田基一
代製者 東京市下谷區中根原町七二 武田基一
發行人 東京市下谷區中根原町七二 武田基一
印刷人 東京市下谷區中根原町七二 武田基一

發行所 東京市下谷區中根原町七二 武田基一
電話 三三七番
郵政 東京六〇五四八番

倭漢朗詠集卷上



立春

暮春

早春

春興

春夜

子日

付若

三月



梅

付紅

柳

花

付落

躑躅

藤

欵冬

夏

更衣 首夏 夏夜 端午 納涼 晚夏
花橘 連 郭公 螢 蟬

秋

立秋 早秋 七夕 秋興 秋晚 秋夜

八月十五夜付 九月付菊 九月盡 女郎花 萩

蘭 檜 前栽 紅葉付落葉 鷹付歸鷹 虫

鹿 露 霧 禱衣

冬

初冬 冬夜 歲暮 爐火 霜 水付春水

雪 霰 佛名

春

立春

逐吹清霽不待芳菲之候迎春

夏物希而露之思

立春日内園
進花賦

池凍東頭風度解忘梅北面雪封寒

...

...

柳正氣力條先動池有波文水盡用

白

今日不知誰計會春風喜水一時來

同上

夜向殘更寒磬盡春生香火曉爐燃

良齋

...

...

たふらむせにさるるにほりのひまに
にうらむいほるがみやまらねはら花
みやまはひらのうらまよゆま
可なりてこしをれわまなり

春興

花下忘得因美策樽前勸醉是春風

野草芳菲紅錦地遊絲柳絮白飛

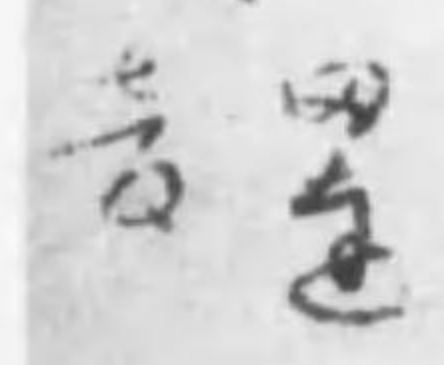
尋酒家花友是春一首記上高志

山枕及望桃日暎紅錦之幅門柳

岸楊風苑菊蕊之孫

暮野層敷紅錦彌當天遊絲柳絮白飛

林中花錦叶其落天亦極好或云



望歎夜月孤と里初便春風変し情
をいしよのたがふをひこくしよあれ
やせしうつせしけしし
けふまのほまれがうわわらひ
わらふのこころはあはれ

春夜

背燭共憐深夜月
暗花同惜少年春
白
さうのよれやみはあやうし
むあ
りしうよみしねやけか
うそ
影短

子日

倚松樹以摩腰習風霜之難犯也和菜
羹而啜以期氣味之克調也
常

信松根摩膏子季々々家満年朽
梅奪楠以二月々雪之海衣 若菜

けのひまをさるれつよこころのたうつせ

こころのこころにながらばさし、あつてさ

ちとせうくちとせうくちとせうくちとせ

わはよみよひいりてよまうつよあつた 若菜

福のひーにーめうらむのひめこあら

ひうてふちよのけをまたい 若菜

若菜

野中菖菜世事推之蕙心鑪下和

羨俗人属之羨指 菖

あまうらはわのいつあせむし 若菜

春の光あけだのきらはらも亦やうら
らたはわのしあまのめいれ
よまのふもふもゆいあわつ、素人
ゆいみね人もつとまらめいれ
うみよつめらわのわらうり 費る

三月三日 付栳

春來遍是桃花水不辨仙源何處尋
春之暮月之三朝天醉于花桃李
感也我后一日之澤万機之餘曲水雖
遙遺塵雖絕書已字而知地勢思魏文
以翫風流蓋志之所之謹上小序
煇叔孝正應同戶桃李淺深似勸益

水成巴字初三日源起周年後幾霜

萬茂

礮石遲來心竊待牽流過手先避

雅規

夜雨偷濕曾波之眼新嬌曉風緩吹不

言之口先咲

桃始華賦
紀

みちとせにならうといふも、れ、よ、よ
わさしそくけうよあひみりよわ

暮春

拂水柳花千万點隔樓鶯舌兩三聲

元

但翅沙鷗潮落曉亂絲野馬草深春

菅

人無更少時須惜年不常春酒莫空

野

劉白若知今日好應言此處不言何

順

いふらよそくけうよあひみりよわ

いさよみてくらしきふたふたのしよ

三月盡

留春と不住春 歸人守溪 猷 風と不

定風起花蕭索 白

竹院君困銷永日花より我醉送残春 白

惆悵春歸留不得 紫藤花下漸黃昏 白

送春不用動舟車 唯別殘鷺鳥与落花 菅

若使韶光知我意 今宵旅宿在詩家 月上

留春不用買城園 花落隨風香入雲 尊教

けしきののちをさるるをとおははわらふよこしん 形似

いふもよめちりわらうとけゆくもこの

ふたふたのしよ

谁家碧树号。啼鸟一庭常。初无紫翠。以
兼堂上。昔有人与。珠箔未卷。
晓赋

咽雾山。鹭啼尚少。穿沙号。笋架绕。元
基。预有酒号。呼为水面。无层风。洗池。白
号。为诱引。来花下。字色物。面生。水色。白
感。同類。於相求。離鳴。去。鷹之。應。喜。轉會。

異氣。而。終。混。就。冷。魚。躍。之。伴。曉。啼。
遊。嬉。之。神。龍。收。精。控。乳。於。寒。栢。周。郎。
之。音。頻。勅。於。百。笑。於。新。在。
普三

新。詠。如。今。案。宿。曾。產。宿。如。及。亦。喜。雲。
西。樓。月。落。在。百。中。夜。燈。照。竹。裏。音。
普三

而。ら。し。ま。の。ご。ち。ろ。あ。し。よ。わ。ま

たらしむの世に... 孝性

あこみきりもふたふき... 孝性

れらふ... 孝性

うらみまの... 孝性

わ... 中務

霞

霧光暎は夜に火字を晴来映以烟白

糝沙茶只三系許誇樹霧後半如珠昔

時... 主春日

うらみのわまた... 允

はるうほみそ... 允

よのわきに... 允

いととしてわづらうたはうらとらみら 伊勢

梅

白斤落梅浮涧水黄梢新柳出城牆

白

梅花带雪飞五上柳色和烟入酒中

章孝標

渐薰脱雪新村裏偷绽春風未扇光

村上 比叟

青丝绿出陶门柳白玉装成庾岭梅

以相公

五岭苍々雲往來但憐大庾万株梅

誰之春色從東到露暖南枝花始開

普三六

いとうと志はくうきうわるあわ
いものむめけふしそよにせりり

安倍彦彦

わつせふよみさむいあひしものこま
そはせんもほゆいのわれを老人
いさよまうしれいさらせむいめれをぬあ

林鶯何處吟
筆桓牆柳誰家
曝翅塵

漸欲拂他騎
馬客未多
遮得上樓人

巫女廟花紅似粉
昭君村柳翠如眉

誠知老舌凡情少
見此寧無一句詩

大庾嶺之梅早落
誰向粉粧道廬山

之杏未開豈趁紅艷

靈犀紅鏡扶素日
春嬌黃珠嫩柳眉

警宅迎晴庭月暗
陸池逐日水煙深

潭心月泛交枝桂
岸口風來混菜蘋

あなをよまのいどよわうらるけりし

あなをよまのいどよわうらるけりし

あなをよまのいどよわうらるけりし

あきやまのふりかへりて
あきやまのふりかへりて
あきやまのふりかへりて
あきやまのふりかへりて
あきやまのふりかへりて
あきやまのふりかへりて
あきやまのふりかへりて
あきやまのふりかへりて
あきやまのふりかへりて
あきやまのふりかへりて

中納言
兼補

花 付落花

花明上苑輕軒馳九陌之塵猿叫空山

斜月露子巖之路 雨賦

池色溶々藍染水花光焰々火燒春 白

遙見人家花便入不論貴賤与親疎 白

當日露風為佐子顯万彩之玉液枝

液浪表裏一入再入之紅 花光染水上
音三品

誰謂水无心流勢隨之波更色流

花不語種漾激之影動脣 月上

欲謂之水則漢女施粉之鏡清莹多

得之花亦蜀人濯文之錦榮耀

同上

孫自何孫唯言為裁世之樣任春風

善三

花飛如錦幾落粧殘表春風未覺相

如殘春風樣上巧北唯孫之殘系芳

善的

眩矣蜀那裁錦耳博素樣調也等

相規

世中たこく様はたのりわきけいの

うはのこくま

初や春姑者如みこら仁る人冬

地重たふ世乃たら小恋く永る痴死

形恒

みくのもちや人より春らむ山様と

いふもわかしく春川より春を夢い

善性

落花

落花不语对舞榭
流水无情入池白

初语落花相送出
言尽飞鸟一时回白

去年面入酬暢之
筵晚尚犹

殊未悔消之座江

落花犹藉风狂夜
啼鸟就语雨打时江

疑雪风翻絮
舞榭落花流水
春去也
惜落花流水春去也
惜落花流水春去也

斜风细雨
落花流水春去也
惜落花流水春去也

落花流水春去也
惜落花流水春去也

落花流水春去也
惜落花流水春去也

落花流水春去也
惜落花流水春去也

藤

悵望お心息三月盡紫藤花落多矣白
紫藤露底疎をち深み竹板中を暮るを相見

た、のうらにそ、さく、し、ち、し、
と、そ、て、ゆ、む、い、あ、ひ、あ、あ、
あ、よ、け、なる、さ、け、の、さ、さ、あ、あ、
し、か、い、ら、ふ、ち、の、あ、よ、て、ち、さ、い、れ、き、

躑躅

晚臺尚用紅遊濁林房初結白 美人言
夜遊人多尋來杞寧順 乞家白 夜朽白 鳥
あ、い、つ、と、よ、け、の、あ、よ、い、さ、う、
い、さ、い、あ、れ、さ、い、

款冬



點着特焚天有意款冬誤院言去風
書云有春相收檢詔帛無文未奉行

係胤

ふけふりくみぬひうまにふみり

厚見如里

ていよやちるえんやまふまのまぬ

わるよのむい山ゆけひとくこまちり

たこふたのんさるよのてふまぬ 並本

夏

更衣

背壁残燈経宿焰用箱衣帯隔年香

白

生衣欲待家人着宿釀當栢邑老酣

讚別作 菅

さしめいろよ下めーたーのさあし
まきそふもしうーのさあし

首夏

甕頭竹架種ま就階底蓋後入夏用
苔生石面極石陰岸出池の小蓋誅
わやのさあし
なうまにかんきみゆふこのさあし

夏夜

風吹枯木晴天雨月照平沙夏夜霜
風生竹夜三層月照松叶卷上り
きこ柳の志困る度ほ涼更杯白月明初
たうこのよさをはわよあるねとしいおとさ

ひとばものさうや ねもはさまふんじ
なともはたしうや てるよのみし
ひとや やすあうかはつてもん丸

程者乃とみ者あゝ 東漢吾は本度
いそ公ぬねえ出ぬは急下り 阿をる
まゝ乃い免

端午

有時當戸危身立無意故園 任膝行艾人首

わうこまもげふよあひこつあやめらてい

ねひおらるや ちうらるたふらん 頼基

さいふまやよまよあひん あやめらてい

けしわるや どのほおとみうれ 能宣

納涼

青苔地上銷殘雨 綠樹陰前逐晚涼

白

露華清苦正夜清 風襟蕭灑先秋涼

白

不是禪房無契處 但知心轉即身涼

白

琉璃好圓香之扇代岸風之長

忘燕晴王拓涼之珠當沙月之自得

白

仰見新菡臨水障 吟古集納涼詩

昔

池冷水無三伏夏 松島風有一夜秋

英的

すしやとらせむらしとらしむらよれ

けあるとふあてらとらしむらよれ

したうらみらにあしとらよれ

むきふいつものやとらよれ

中務

はむしーのひとれあしあ
かきまはるきまはるの
てまはむしーれんやひ

蓮

風荷老葉蕭條綠水蕙
殘花半落紅
葉展彩
端尚初
月花井
水散入
蒼風

湖一井深層清風曉水泛
紅志白雲結

岸竹條位庭多如
濤為葉動是魚遊

孫河更實吳山曲
便是五湖府下花

經為款目佛
如胎知酒花中
植善根

てまはむしーのひとれあしあ

てまはむしーのひとれあしあ

郭公

一帯山を眺むる可踏水螢秋夜中

許渾

さつよみたはうつれよまをさつ

明書子

たのむるさつものさつさつ

さつさつさつさつさつさつ

さつさつさつさつさつさつ

さつさつさつさつさつさつ

さつさつさつさつさつさつ

忠見

螢

螢火乱飛秋と正厓星早没夜初長

え

葭水暗螢夜揚柳風高鴈送秋

許渾

明：仍在誰退月光於屋上皓々不消

豈積雪片於床頭

秋蛩賦供賦
紀

山徑卷裏疑過岫海賦篇中一似宿流

月前
直接

らさそあくあれさるやぶのこころ
わのせにささしわはをさるすのこころ
はくめんかろれわものまのこころ
のよこらあまれさるのこころ

蟬

遅くそ春日玉梵暖そ温泉溢嬌々

そ秋風山蟬鳴そ宮樹紅

悪字を
白

ふ峯を詠合梅雨五月蟬あつ送まの秋

字未祐

冬の下羽無そ素菟守蟬鳴芳々紫澄そ秋

許憚

と冬そ何物先秋ふそ蟬あつ送まの秋

同家
え補

あはれみちやうつてこすの心は
まよひつたはたしほさあよむせすれ
まねひつたはたしありとふたし
中務

301
10

昭和十年五月二十五日印刷 定價金貳圓參拾錢
昭和十年五月二十日發行
東京市下谷區中區町七二
加左名圖書全集刊行會
代售者 武田基一
發行所 東京市下谷區中區町七二
武田基一
印刷人 黒川秀一
（本配同六第）
（一）集跡齋廣和

終

